

屋代

- 7 6 5 4 3 2 1



(長野)

の千曲川右岸の自然堤防上に広がる遺跡の総称である。今回紹介する北陸新幹線関係の調査区は、「屋代木簡」(本誌第一八号)が出土した高速道路地点の西側約八八〇mに位置し、一九九三年度から三カ年で八二九〇㎡の調査が行なわれた。

特に四つの検出面が重層する北側の調査区（六・七区）では、古墳時代後～末期の竪穴住居一七軒・掘立柱建物一棟、八～九世紀の竪穴住居五七軒・掘立柱建物五棟、水田・畠などが検出された。木簡はこのうち六区から出土した。

出土した木簡は一点で、第四検出面で検出された掘形径二・七m 深さ二・五mの井戸（SE六〇〇二）に残存していた、七点の木梓材のうちの一点に転用されていた。この井戸は七世紀後半の住居を切り、平安時代の水田に覆われており、七世紀後半～九世紀半ばの時間幅の中だと考えられる。この他六区では、墨書土器四七点が集中出土しており、特に「夫」字のものが二八点上り、注目される

8 木簡の釈文・内容

(1)

二	
三	
馬	驛

1111

539×54×2 011

本簡裏面は剥ぎ取り無調整。表面は井戸枠に転用されていたためか、風化によって調整法は不明である。文字は左側に寄って六文字確認できる。樹種はサワラである。

9
関係文献

財長野郎埋藏文化財センター「北陸新幹線埋藏文化財発掘調査報告書三 更埴条里遺跡・屋代遺跡群」（一九九八年）（水沢教子）